

裸体でいるには虫が煩すぎる。

三上 鯛

ドアノブに手をかけて、ふと、服を着ていないことに気が付いた。そこで思い出した。そういえば、外に出るには服を着なければならぬ。でないと警官に捕まってしまうらしい。

寸出の所で思いとどまり、部屋に戻った。一人暮らしを始めて二日目、遂に水道水だけで腹が満たなくなった。どう足掻いても今日、飯を買いに行かねば警察ではなく救急隊、もしくは死体となった後、別の意味で警察のご迷惑となる。早急に服を着なければならぬ。しかし、服がない。

よく女性、または男性は『服を買いに行く服がない』というと聞く。それはまだ甘いと言わざるを得ない。私ぐらいになると、外に出る服がない。比喩ではない、繰り返す、これは訓練ではない。私が持っている武器（服）は下着のみだ。皆さんは知らないかもしれないが、機能性を考えれば実はコレで十分である。下履きの必要性は分かるだろうし、胸当ても無ければ肩が凝る。

ちなみに私はミニマリストではない。本とその他の紙は引越して二日なのに散乱しているし、スマホの中のアプリはどこに何があるか把握していない。記憶

力と思考力は生活に多少困る程度に弱い。例えば今のように生物は食料を食べないと死ぬことを忘れる程度には頭が弱い。

そんな私がなぜ服を着ないのか。例えば、ルッキズムへの反抗、自己表現として外側を着飾ることへの批判・抵抗、社会的地位からの解放、懷古主義、着る義務への反抗、自分の裸体が最も美しいというナルシズム（例に挙げただけで、まったく思っていない。見せる相手もないし、家賃二万のボロアパートに鏡はない。もちろん私も持っていない）、パーフィットのように自己同一性は心理的同一性によって担保されるため服の着用如何を議論の俎上に上げること自体がナンセンスである、なんてことを言いだすわけではない。私が現在よりもっと頭が弱かった小学生のころから服を着ていない。

理由はちゃんとあるが、説明するには私は空腹すぎる。水だけでは体が動かないことを身をもって体感できているこの現実を喜ぶべきなのか。ベッドに倒れこんでどうにかこの状況の打開策を考える。

そういえば、頼れる人はいない。引越してきたばかりなのだ。十八年過ごした地で心を開ける相手がない。きなかったのに、二日で飢餓を救ってくれる友達が出来たら、過去の私がタイムマシンに乗って殴りに来る。「お前は、そんな奴じゃない。もっとジメジメして、

地面に這いつくばって地衣類の仲間になりな！」と。そんなことを考えていると腹の虫が鳴った。考え事をしていると腹が減る。そういえば三戸（↑漢字あつてる？ 読み方はさんしで合ってるはずなのけど）の虫が人の体にはいるらしい。落語の中にも似たような話がある。疝気の虫だったか、あれは結構好きだ。特に退場の仕方が面白い。

「もし」

そう、嘶家さんがキョロキョロしながら去るのだ。女の体には下の袋がないからなんて下品な……。

「もし！」

声をする！ 総毛立つ。スマホは充電を忘れて音が鳴らない。私以外に私の部屋の中で声を出せる人はいない。

「ここです！ 貴方の腹の中にいます！」

腹が何かに蹴られた気がした。ウツと声が出た。口から水が噴き出しそうになった。腹にいたといった声の主は私よりも声が高い。小さい生物なのか？

ポン、と腹を叩いてみた。

「うわっ、揺れるので止めてくださいまし」

文句を言われた。少しイラついた。

「お、怒らないでください。腹の虫は収まってやりますので」

さっきまで揺れていた胃が収まった。なるほど、江

戸の人はこの様子から「腹の虫が収まらない」という慣用句をひり出したのか。てっきり比喩表現かその時代の胃痛の原因説明の解釈からきているものだと思っていた。

「で、何？」

私が聞くと腹の虫がしゃべり出した。

「私は三戸の虫の中でも中戸と申します。普段は貴方が食べる食物の栄養を吸って生きています」

「なんと意地汚い。間借りしておいて食べ物も盗むとは。私の腹に住むのなら家賃を払え！ この家の家賃は二万六千から半額の一万三千、いや虫だから、負けて一万で間借りさせてやる」

虫が足踏みを始めた。口の中が胃液の味で満ちる。

「三戸の虫を知らないとは言わせませんよ。私たちは万病の元であるばかりか、傍証、強欲、色欲の元であり、地獄の沙汰の決定権を持つ。それに、貴方の寿命を縮めることもできるんですから」

そうだった。こいつらは私が死ねば自由になって祀られる、つまり神になれるから、早死にさせて来るんだった……。

「すみません」

「分かればいいんですよ。それで本題なのですが、貴方が食べないせいで私たちが飢餓に陥っています」

「お、ラッキー。お前らが死ねば天国行き確定じゃん」

胃が震度七で揺れ始めた。白目になった。

「私たちは別にいいんですよ。今日は庚申の日。閻魔様に謁見が叶う日です、貴方の悪行を包み隠さずすべて閻魔様に申し上げて、地獄に行かせてやります」

嘘だろ、まさか六十日に一度の庚申の日だとは。三尸の虫は六十日に一度の庚申の日に体から抜け出し閻魔様に宿主の悪行を告げ寿命を縮める。

しかし、私が起きていればこの虫は出てこないはずだ。今日は徹夜をすれば……。

「貴方が起きていようと、上尸が無理やり寝させるか尻の穴からでも三匹そろって閻魔様のところへ向かいますからね」

忘れてた。こいつらは頭と胃と足に一匹ずつで三尸なのだった……。

「で、ご飯を食べるというのですな」

「ええ、そうです。そうしてもらえれば、私たちは貴方の悪行を閻魔様には伝えません。それどころか善行を多分にお伝えします」

ほう、なるほど。この虫は話が分かる。

「しかしですよ、中尸さん。私は服を持っていません。つまりは外に出る服がないのです。人間の世界では外に出るには服を着なければいけないのです。そうでないと、飯を食べる前に豚箱行ですよ」

なんと面倒くさい、と中尸が唸る。私もそう思う。

裸体でいるにはあまりに社会規範は厳しすぎる。

「そういえば、この家に入居するときに来ていた服はどこへ行ったのです？ 外から入ってきたということは一着はあるでしょう？」

「アレ？ 中尸さんならわかると思ったのですけれど」

「食べました」

「食べたあ？」

腹の虫なら宿主が何を食べたか把握していると思っただが当てが外れてしまった。中尸は説明しろと胃壁を蹴った。

「ええ、『まんじゅう怖い』っていう落語でもあるでしょう。目の前に嫌なもの・怖いものがあれば食べるのですよ」

「それはまんじゅうが好きかつ食べ物だからでしょう！ 服は食べ物じゃない！」

確かに。虫に論破されるのは悔しいので黙った。反論しなければそこに議論は存在しない。

「ハア、仕方ない。ちよつと待ってなさい」

スマホのバイブレーションのようなものが腹の中になった。

「もしかして、中尸さん、スマホ持っています？」

「当たり前でしょ。今は令和よ」

閻魔様の謁見もリモートになればいいのだけれど。

中戸はそうばやきながら誰かと通話し始めた。

しばらくして、腹が光った。虫もいれば腹も光る時代か、とみていると、腹の上にブロンドの美女が立った。

「貴方が落としたのはこの金の服ですか。それともこの銀の服ですか」

美女の手には金と銀のジャージが光り輝いている。

「いや、普通の服です」

イソップ物語で調教済みの正直者の私の返答は早い。「正直者のあなたには、この金の服を授けましょう」

パサリ、と音がして、腹の上に金の服が落ちた。瞬間、美女は消えた。クソッ、あの美人の服をはぎ取れば、結婚できたかもしれないのに。

「はい、服は用意できたので、飯を買いに行ってください」

中戸は腹を揺らしながら、急かした。

「いや、私は状況説明を求めます。あの金ピカブロンド美女は誰ですか？」

中戸は質量をもった溜息を吐く。

「貴方の胃液と胃を湖に見立てて、泉の女神に来てもらいました」

「なるほど頭がいい」

「そうでしょう。上戸は最近、本に耽っていて。らのべ？ とかいようなものにド嵌りして呼びかけにも答えま

せんし、下戸は下戸で万年前から変わらず猿のようにに色情に酔って……。私が下剋上し上戸になる日も近いでしょう」

怠慢すぎる。二か月の夏休みで生活を破壊された後の限界大学生かよ。あ、虫も猿は知性がなくて性事に耽るって認識なのか。それに上の方が偉いという価値観のね。制空権は大事にしないとア、ではなくて「まって、こんな金ピカな服着てけないですよ」

「いいじゃないですか。私は好きですよ。もつと輝いても……」

ああ、そうだった、こいつは宝石を宿主に集めさせるんだっけか。どうせなら上戸に私の退化した食欲を煽ってほしいところだ。

「しょうがないか、私はこれを着ないと死ぬわけだし」「そうでしょ。ま、さっさと死んでくれてもいいんですけど」

三戸の虫らしくカジュアルに私の死を願われてしまった。これは意地でも生きてやらねば。

「食べるものは蕎麦でね」

「ごめん、蕎麦嫌いなんすよね」

中戸は腹を強めに蹴った。喉が胃液でイガイガする。中戸はやはり疝気の虫だったか。疝気の虫は蕎麦好きで唐辛子嫌いで有名だ。キムチでも食ってやろうか。辛い物苦手だから無理だけど。

「蕎麦屋に行つて匂いを嗅ぐくらいならいいですよ」
「貴方、私をここから追い出そうとしているでしょ。」
匂いを嗅いだくらいで外に出ていくような、バカではないわよ」

おっと、こいつは自分が題材の落語を知っているようだ。辛い物が苦手な私はこいつを腹から逃げ出させることが出来ない。本来ならば、辛い物を食べれば腹の虫は収められる。女は足の間に袋がないから、虫の逃げ場がない。だから辛い物を食べれば逃げる場所をなくし体から出ていくというわけである。よく考えたものだ

「なるほど。まあ、とりあえずご飯を買いに行くか」
金色に光り輝くジャージを着て、先ほどは引き返した扉を開ける。

不審者として通報されるかと思つたが、案外そんなことはなかった。晴れたこの日はジャージは陽光を反射し、道行く人々すべての目を潰していった。盲目の患者の目を直したキリストと逆。逆リストだ。

スーパードに入ると腹の虫が小声で「鮮魚コーナーに行きなさい」と言つて来た。お目当ては光物のようだ。中戸の虫らしく光物がお好みのような。既に私はこんなに光っているというのに。光物が好きと言えばドラ

ゴンを思い出すな。ちなみに、私はドラゴンには二足歩行をしてほしい。進化論的に手が翼になるのだとしたら、ドラゴンは二足歩行でないとつじつまが合わない。实在性を持ったドラゴンの方が滾る。

「中戸さん、中戸さんってどんなフォルムなんですか」
二足歩行のドラゴンだ、という返答を期待する。

「下戸は足の姿で、上戸は人の姿ね」
「いや、中戸さんは……」

「決まった姿はないわ。まあ獣とだけは決まってるわ」
来た。これはチャンスだ。私が中戸の姿をドラゴンと決めて広めたら、ドラゴンになるんじゃないだろうか。

「ちなみに、ドラゴンとかにご興味は……」
「無いわ」

中戸の判断は早かった。

そんなこんなで、何とか私は飢餓を脱し、服を某AからZまで全てがそろそろ密林で外出用の服を注文した。中戸はあれ以来、ちよこちよこ現れては「金の服を着ろ」と煩い。将来的には天国へ、という人生設計を立てている私としては、三戸の虫が一人の中戸に逆らうわけにはいかず、妥協として家の中では金に光る服を着続けている。

嗚呼、裸体でいるには虫が煩すぎる。

